



長谷寺かわら版

百日紅

97号

2017 (平成 29) 年
8月1日

盆と施餓鬼会

夏は、寺にとつては一年で最も忙しい、盆経の季節です。以前は棚経と呼んでいました。これは、先祖を



これが施餓鬼壇。本堂東側の廊下に設えます。周りに本尊たちの名が書かれた5本の5色の幡。カラーでないのが申し訳ない。

迎えるために特別に設えた精霊棚を拜むことからその呼ばれるわけですが、うちの檀家さんにはこれを拵

えている家は皆無で、どの家も仏壇で拝みます。ですから、盆に先祖供養のために読経をするという意味で、盆経と呼ぶようにしました。

長谷寺では、7月の終わりころから、このための檀家巡りを始めます。私ひとりではとてもこなされるものではありませんので、近隣や知り合いのお坊さんの協力を仰いでいます。みなさん、ぼくよりずっとありがたいお坊さんたちですから、助っ人に当たった家は、とても運がいいとお考えください。

檀家巡りの終わった8月13日と14日には、本堂で合同の盆の法要をします。私たちが足を運ばなかった檀家さんたちが対象ですが、いまや10軒を超える家が集まります。

半月以上にわたった盆経が終わると、16日から鳴門結衆の各寺院で施餓鬼会が始まります。盆に供養してもらえなかった無縁仏や餓鬼たちを、みんなで寺に集まって供養し、あわせてその功德を先祖供養にも振り向けようというものです。ですから、先祖供養の卒塔婆を作り、法要の最後にはこれを読みあげ、拜んだ卒塔婆は墓に立てます。

施餓鬼法会にあたって
辻 雅榮

施餓鬼会では、法要に先だって、高野山から派遣される布教師さんの法話があります。布教師だからといって、誰でもいい話をうまく聴かせてくれるとは限りません。むしろそういう人は稀、というのが私の印象です。

昨夜お話をいただいた布教師さんは、施餓鬼法要の話をもともと聞きやすくて聞かせてくれました。聞きっぱなしではあまりにもったいないし、これまでもったいないことをきちんとして取り上げたことがなかったので、お話を文章にまとめたくれないかとお願ひしたら、快諾して、原稿を送って下さいました。

かなり長文の上、内容も難しいかも知れませんが、どうぞご味読下さい。僧侶が書くのはかくあるべきという、格調高い文章です。

を供養するばかりか、百千万無数の仏様を供養することによって生じる功德と何ら変わらぬ、餓鬼も仏様も全く優劣がないとされています。ですから、供養を受けた餓鬼は天であるいは浄土に生まれ変わります、供養を施した人々は、長寿で健康に恵まれ、日に日に力がみなぎって、福德と知恵を増し、大いなる繁栄を遂げるとされています。

お釈迦様から施餓鬼の法を授けられた阿難は、さつそく施餓鬼を行なったところ、百二十歳まで寿命を保ち、修行を完成し、ついに悟りを得たといわれています。ほかに、この施餓鬼の法を修行した多くの人々が、計り知れない功德を得たといわれています。嬉しくて嬉しくて、ついには踊り出し、手の舞い、足の踏むところを知らず、嬉しさのあまり舞い踊ったそうです。それが、きまつて毎年お盆に盛んに行われたものから、「盆おどり」といわれるようになり、とくに鳴門結衆のお寺では、この時期にこ

ぞつて施餓鬼法会を厳修するものですから、施餓鬼の功德が拡がって、ますます盆踊りが盛んになり、ついに日本三大踊り「阿波踊り」として、全国にその名を轟かすまでになつたと聞き及んでいます。

◇弘法大師のみ教え
実のところ、この施餓鬼法は、弘法大師によつてわが国に請来されたということ

は、あまり知られていません。空海上人は、延暦二十三年（八〇四）年七月六日に九州肥前国田ノ浦を発つて入唐し、唐の長安青龍寺の恵果阿闍梨から密教の正系を受法し、経論・仏像・曼荼羅・法具などをたずさえて、大同元年（八〇六）十月頃に帰朝しました。そしてこの年十月十二日に唐より持ち帰つた経論などの目録を、空海上人自ら記録し、朝廷に献上したのが、いわゆる『請来目録』です。

この中に施餓鬼を説く經典『施焰口餓鬼陀羅尼經』が含まれています。また空海上人が唐から持ち帰つた『三十帖策子』にも自ら書き写した

施餓鬼の作法（『施諸餓鬼飲食及水法并手印』）が含まれており、これらをベースにして、現今の真言宗の施餓鬼法が組み立てられています。

私たちがお寺の施餓鬼法会に参列することは、施食棚に集まつた餓鬼に布施をする

とですが、それは同時に自分たちの中の餓鬼に供養することになるのです。苦しんでいるものや餓鬼に布施をする

ことが、自分の心の中に棲みついた餓鬼の心をこの世の生き仏である菩薩の心に変えていく、最も効果的な行為です。

弘法大師のお言葉に
苦を見て悲を起こすは観音の用心 危きを視て身を忘るるは仁人の務めるところなり

困っている者を見ると、居ても立つてもおられず、あわれみの心が起こるのは観音菩薩の気がかりであり、他者の危険を視れば、自分を投げ出して他者を受け止めようとしてしまうのは、思いやりの心をそなえた人なのだというこ

とです。目の前で苦しむものがあれば、たとえ餓鬼であつてさえ救済してやまないという弘法大師の心より生まれた救いの手立て、それがこの施餓鬼法会なのです。

係ないとばかりに、お喋りしてきますから。今年はずひ、耳を傾けて下さい。そこで語られているのは、次のような目連の物語です。

▽ △
いかがでしたか？ ぼくのような生臭坊主には、なかなかこういう文章は書けません。

さて、布教師の話が終わると、結衆の僧侶たちによる法要が営まれます。まずは揃つて読経し、そののち「施餓鬼秘法」を修します。

その秘法のメインが、施餓鬼という名前の通り、餓鬼に食べ物を施す作法です。真言を唱えながら、器に盛りられたご飯を餓鬼たちに与えるという所作をするわけですが、この秘法に先だつて、法要の趣旨を述べる祭文が読みあげられます。施餓鬼会の祭文なんて、あまり聞いたことありませんよね。みなさん、ここは関

とで、結衆の僧侶たちによる法要が営まれます。まずは揃つて読経し、そののち「施餓鬼秘法」を修します。

その功德で母親が救われた。また、その他の多くの霊たちも救われ、ともに悟りを得ることができた。

たしかに「餓鬼」という言葉はでてきますが、これは目連さんのいわば親孝行の話で、盆の意味が説かれた『盂蘭盆經』という經典に出てきます。しかし阿難の姿はありません。そして

神通力を身につけていた目連は、死んだ母親が餓鬼の世界に墮ち苦しんでいるのを見て、なんとか救いたいと願つた。しかし、母の苦しみを除こうと、いろいろ試したが叶わない。そこで、師である釈迦の教えに従い、僧侶たちが長い修行を終える7月15日、その僧侶たちに食物などの布施したところ、その功德で母親が救われた。また、その他の多くの霊たちも救われ、ともに悟りを得ることができた。

たしかに「餓鬼」という言葉はでてきますが、これは目連さんのいわば親孝行の話で、盆の意味が説かれた『盂蘭盆經』という經典に出てきます。しかし阿難の姿はありません。そして

神通力を身につけていた目連は、死んだ母親が餓鬼の世界に墮ち苦しんでいるのを見て、なんとか救いたいと願つた。しかし、母の苦しみを除こうと、いろいろ試したが叶わない。そこで、師である釈迦の教えに従い、僧侶たちが長い修行を終える7月15日、その僧侶たちに食物などの布施したところ、その功德で母親が救われた。また、その他の多くの霊たちも救われ、ともに悟りを得ることができた。

布教師さんの話には目連の影もない。

実は盆と施餓鬼会は、全く別の法要でした。それがいつしか一体化してしまい、施餓鬼会で盆の物語が語られているわけです。

盆と施餓鬼会が合体するにいたった経緯は不明ですが、『盂蘭盆経』では盆の供養によって餓鬼世界で苦しむ母だけでなく、「七世の父母、六種の親族」たちをも救うことができると思えます。遠い過去の先祖や親族たちも救えるわけです。盆の供養で餓鬼世界の多くの魂を救えるというのですから、盆と施餓鬼が同じものと考えられるようになったのも当然かもしれません。

ともあれ、盆と施餓鬼会の一体化によって、盆供養の対象が先祖の霊魂だけでなく、餓鬼や怨霊、その他さまざまな、幅広い死者たちの霊魂たちにまで広がっ

たわけです。打ち続く戦乱や災害で多くの命が失われ、その慰霊が求められたことが、この一体化の背景にあったのでしよう。

この世に生起する多くの災いが、死んだ霊たちの怨念によるものだと考えられた時代には、慰霊という行為は、為政者たちによって行われるべき政治に他なりません。そして、そういう先祖ではない多くの霊たちを供養することもまた、自分の積む功德であり、先祖たちへの供養にもなるのだと、お坊さんも説くようになったのでしよう。

◆誰のための供物？

冒頭に書きましたように、長谷寺の檀家ではもはや皆無ですが、鳴門市内でも地域によっては、いまでも盆になると玄関先や庭先などの戸外に精霊棚を設けて、供物をまつっている家は少なくありません。僧侶たちはその棚を拜んでまわ

るわけですが。

精霊棚をまつっている家では、ご先祖さまたちを迎えるためにお供えをしているのでしようが、拜んでいるお坊さんたちの中には、戸外にあるのだから餓鬼たちに施す供物の棚と考えている人もいます。

しかし全国的に見れば、地域によってさまざまな精霊棚の祭り方があり、中には、先祖たち、新仏、そして餓鬼仏のためにと、三つの棚を設ける地域もあります。盆と施餓鬼が、民俗の世界でも一体化しているこ

とが見て取れます。

四国では、そういう三種の区別をせずに、まとめて戸外にまつることが多いようです。盆と施餓鬼が一体化しているわけですから、鳴門で設えられる精霊棚は、きつとそういう三種の霊たちすべてを供養の対象にしたものなのでしよう。

◆内と外の狭間に

寺で行われる法要は、年忌の法事でも、盆の供養でも、もちろん大法会でも涅槃会でも、内陣の本尊のそばに位牌や供物をまつり、本尊に向かって拜みます。

しかしこの施餓鬼会だけは、内陣を避けて外陣の、しかも廊下に棚を設けていますが、お気付きでしょうか。相手はなにしろ餓鬼ですから、聖域である内陣に近寄せないようにするためか、あるいは内陣に供え物をしてしまったのでは、餓鬼たちが遠慮してしまつて、せつかくの施しに近寄

らないからなのか。

この棚はいわば大型の精霊棚。祭壇のように見えますが、あくまでも餓鬼に施す供物を置くための棚です。では本尊はどこにおおすのか。施餓鬼会の本尊は、さきの話に出てきた五如来で、棚の周囲に立つ五色の幡に名前を記すのみです。

供物を食べに集まった餓鬼たちが遠慮しないように、そして彼らを守るように、棚の周囲に控えているのかもしれない。



市内、北泊地域の精霊棚。趣向を凝らしたものが多です。(写真提供 井海密雄氏)

〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1
電話 088-686-2450
ファクス 088-686-2130
E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
URL
http://www.chokokuji.jp/

新長寺
編集 裕信